寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

秋の風物詩!! 筑前木屋瀬 宿場まつり

おすすめ度 ★★★★

「みんなで踊ろう宿場をどり」のキャッチフレーズで恒例の〔筑前木屋瀬宿場まつり〕が今年は十一月一日(第一日曜日)に執り行われます。

此の行事(イベント)は　往古より遠賀川水利交通の要衝として開け　江戸時代には長崎街道・筑前六宿のなかでも筑前内宿・赤間街道との追分宿として随一の賑わいであったと伝えられる当地・木屋瀬の其の永い歴史に培われて来た歴史的文化財産を活かした〔文化の薫るまちづくり〕の推進を趣旨とする「八幡西区役所まちづくり推進課」の〔長崎街道黒崎・木屋瀬キャンペーン〕の一環事業として始められたもので　開催当初は先行の〔黒崎宿場まつり〕の縮小版的趣も否めませんでしたが其の後　主催団体の二度に亘る返遷　又　企画理念の刷新により　今では基幹企画を〔宿場踊り〕を中心とする〔筑前伝承盆踊りの祭典〕と云う"地域の歴史的文化財産"を活かした他に類無き特色を持つ祭典として対外的にも広くに知られると共に木屋瀬地域全住民の参画する祭典へと発展を遂げた事を慶びと致します。

つきましては　木屋瀬の未来を担い行く若い世代が郷土愛を育み誇りを持てる行事へと成長する事を目標に　本年も木屋瀬住民に依る〔自主企画〕・〔自主運営〕をモットーに地域全体で〔筑前木屋瀬宿場まつり〕に取り組む所存でございますのでご協力の程　宜しくお願い申し上げます。

副実行委員長　柴田泰助

── お知らせ ──

企画展「宗祇(そうぎ)の旅と扇天満宮」

平成21年10月23日(金)～11月28日(土)

文明12年(1480年)9月14日に木屋瀬に泊まり、紀行文『筑紫道記』を書いた室町時代の連歌師、宗祇の旅を紹介します。また、宗祇が扇をもらう夢を見たといわれる「扇天満宮」の由来と変遷を語る展関連史料を展示します。ご来場お待ちています。

祇園宿場祭　盛大に!大成功!!

── ご協力ありがとうございました ──

栄えある一番山笠(本町六町赤山笠)当番町と云う大役を　私ども真名子住民が微力を結束し何とか務め上げる事が叶いました事　此れも一偏に　各町内よりご出仕戴きました山笠関係者の方々やご指導・ご支援・ご芳志を賜りました方々など　多くの皆様のご協力の賜物と心より感謝し厚くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

今回で二回目の山笠当番町経験でございましたが永い歴史に培われてきた木屋瀬祇園の伝統の重みと山笠に寄せる木屋瀬住民の熱き思いに新たに感銘した次第です。

つきましては　来年度当番町へと山笠当番町看板を渡した今　真名子町内会では六年後の次回山笠当番町に向けて早速準備を進める所存でございますので　今後ともご指導・ご鞭撻の程宜しくお願いを申し上げ挨拶と致します。

真名子町町内会長　幸丸憲一
総取締役　笹井和男

今年の二番山笠新町六町の当番町を務めました改盛町は、全部で二十五世帯という極小の町内です。町内はもとより周囲の皆様の当番がつとまるかどうかの心配の中で、「有終完美」を目指して「シンプル」と「結束」をテーマに頑張り、無事重責を果たすことができました。これも偏に町内外の多くの皆様方のご支援・ご協力の賜物と心から深く感謝申し上げます。

今は「やってよかった」「やれてよかった」の余韻に浸りながら、これからの祇園祭山笠のますますの充実・発展を祈っています。

改盛町町内会長　梅本静一

木屋瀬宿人馬方徳平　同宿問屋左七　御届申上ル口上之覚　其の二

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

前号でロシア国使節が長崎に来航し、和親・通商を求めて来たので、幕府より応接掛として筒井肥前守と川路左衛門尉一行が派遣されたことを述べた。

長崎では、プチャーチンと都合五回の会談を重ねて、国境の確定については、千島列島の択捉島は日本領であって、樺太島は今後に両国の実地調査で決定する事。長崎・大阪・函館の開港を含む和親・通商条約締結は、日本が他国と通商条約を結んだ際に、ロシア国にも同じ条件を与える旨を保証する事。以上の合意が出来て決着した。

筒井肥前守と川路聖謨一行は大任を果たして正月十八日に、長崎を発足して江戸へ向かう帰路も、再び二手に別れて長崎路に入ったのである。

そこで、四十日を要した長崎滞在を終えた川路一行が、木屋瀬宿に着くまでことを弘文館出版の川田貞夫著『川路聖謨』より抜粋した。

川路聖謨は、旧姓を内藤といって豊後日田の出身で、日田郡代の手代であり、内藤歳由の次男であった。後に一家は江戸に移り、御家人の川路家に養子にいって、幕府の役人となって昇進を続けて、勘定奉行まで抜擢された。

一行は大村宿に泊った次の日は、彼杵・嬉野・塚崎を経て二十一日に、肥前佐賀に入って一泊する。

藩主鍋島斉正の案内で反射炉や大砲鋳造の製作過程を視察した。翌日の田代宿では、故郷日田より訪れた日田郡代や儒学者広瀬淡窓や叔父高橋古助達と一夜を歓談した。

二十四日には、筑前六宿の山家宿に入り、藩主黒田斉溥と会っておるが、聖謨は長崎に下向する際の昨年十二月四日に、木屋瀬の御茶屋で帰路の時の再会を約束していた。酒を酌み交わしながらの寛ぎの合間に、藩主愛蔵の数々の名刀を鑑定して夜を過ごしている。

翌朝、山家宿を出立して飯塚・木屋瀬を通行している時、街道を往来する飛脚筋の話「江戸湾の浦賀に異国船が渡来した」との噂さが聖謨の耳に飛びこんだ。更に、柳川藩の飛脚から「異国船が五隻入港してその内の一隻は蒸気船で猿島に投錨した」と聞いて、『猿島へならば、アメリカ船にて、ペリーの党なるべし。』と即断して、一行の旅路を急がせたそうだ。

木屋瀬に宿泊した聖謨は、江戸表での異国船の詳しい情報を知りたいので、二十六日早朝の継立の準備と出立を行った。ところが、次の宿駅の黒崎宿到着の間に、一行の荷物継ぎ送りに三件の破損事故が発生した。

一件目は、『御支配役向七頭様(勘定奉行の指図を受ける分掌を担当する七頭様)継立申上候処(荷物の継ぎ送り)御道中ニ頻ニ口々粗相仕恐入候(黒崎に向かう途中で度々荷物を傷めた事故を人々より指摘された。)』

二件目は、『川路左衛門尉様御荷物粗相仕候段(川路聖謨様自身の荷物を過って破損させました事。)』

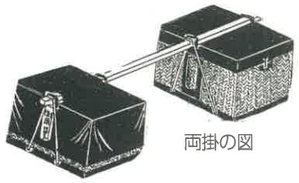
三件目は、『中村為弥様両掛(土台換(勘定奉行の部下で勘定組頭中村為弥様の両掛(旅行用行李の一つで天秤棒の両端に挟箱を括り付け肩で担ぐ)の土台(行李の底)が傷んだ。』以上の破損について、問屋と人馬方が人足達の過失であると認めている事は、『早速宿役人共罷出御断申上候処(人馬方が出向いて、お詫び申した事)』

上記の文によってわかる。『御内済(仰付於私共も難有仕』内済は当事者の話し合いで和解する事であるが、次の文で、『被仰付』は、命令された事になる。身分差別の時代なので、町方より内済を提案した事は明白であり、最後の私共も有難く思っている語句で、低頭平身の様子が想像出来る。こうした荷物の輸送を担う継立は、その宿場に課せられた公役(義務労役)といいながらも、宿場の町方役の苦労をうかがうことが出来る。

繕料(修繕代)として、川路聖謨の荷物に銀四匁、中村為弥の両掛土台換繕料として銀三匁を差し出している。

当時は、関西以西の通用貨幣は現在の銀貨であるので、銀一匁は現在の貨幣価値に換算すると千七百円相当なので、三匁は五千百円程度と四匁は約六千八百円相当である。

最後に付記すると、川路聖謨は安政元年に日露和親条約を調印しているが、安政大獄で大老井伊直弼より隠居差控えを命ぜられ、幕府の崩壊を嘆いて明治元年に短銃自殺をしている。



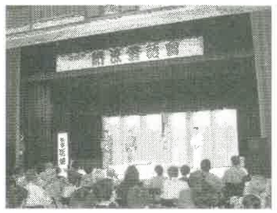
両掛の図

UP ファン急増中　こやのせ座納涼落語会

〔こやのせ座〕夏の終わりの恒例企画〔納涼落語会〕が今年は八月二十三日に開催され残暑厳しき中にも拘わらず百六十人をも越す落語好きで〔こやのせ座〕は大入となりました。

今回の高座は　一番手の前教育次長の神代　明氏(粗忽屋無笑)の「天災」

二番手に貫小学校の新森修二氏(粗忽屋鉄平)が「船徳」続いて到津小学校の浦田一幸氏(好色亭勘六)が「つる」最後に前・学部長の佐藤弘毅氏(於家馬亜)が「質屋蔵」と全員が古典物を熱演されましたが噺に入るまでの前口上から始まり噺の落ちまでの間　観客は見事に高座に引きつけられ　正直申しまして　毎度お馴染の出演者の皆様ともに回を重る毎に上達度が伺え　来年が益々楽しみの〔こやのせ座納涼落語会〕でございます。



最後に佐藤弘毅氏(於家馬亜)に於かれましては昨年より現在の勤務地・東京都より遠路遥々自費参加戴いて居ります。心より感謝いたして居ります。

こやのせ座運営部会長　柴田泰助

シリーズ　筑前木屋瀬宿　神仏めぐり

第十七回　須賀神社 ～その一～

須賀神社は、私の住まいと同じ本町内にあり、初詣、初老賀、還暦、と人生の節目節目にお参りし、又困った時の神頼みとはよく言ったもので、お願いばかりして無事に七十歳を迎えました。私にとっては、須賀神社は信仰と言うより日常の生活の一部の場所でもあります。さて、戦後の経済優先の世の中から、心の時代へと世の中が変わって行く中で、各地の神社は人間にとって環境の良い「癒しの空間」として再評価され神社巡りをされる方も多くなっています。さらにそれだけでなく、歴史や建物等様々な事柄に興味を持って愉しんでいる人も居られます。例えば、神社のシンボル「鳥居」ですが、一見すると同じように見えますが、さまざまな形があり材質、構造も異なっています。昔の日本人は鳥は霊界の使者として敬い、鳥の居る処、「鳥居」に神が降臨されると信じ神域として大事にしたのが始まりとされています。

次に「注連縄（しめなわ）」です。神聖なる場所に穢（けが）れが入りこまないように張り巡らすのが注連縄です。注連縄で囲まれた場所は神域なのです。祇園祭りの時に各家に巡らす縄も注連縄の一種で邪神や不浄なものが入らないようにする意味があるのです。元来日本の神様は社殿に鎮座するものでなく、天空や海の彼方（いかくら）にいて、人々が礼を尽くして迎えれば、磐座（いわくら）と呼ばれる特定場所の巨岩や樹木、滝や森等に降臨し人々の安全と五穀豊穣の恵みをもたらしてくれるという自然崇拝の考え方なのです。須賀神社境内にある巨木に注連縄が張ってあるのも神が宿るとの考えからです。仏教伝来以前までは神道は社（やしろ）を持たなかったのですが、仏教寺院が建築されるに伴い、仏教とは違う形で神社独特の建築様式で社を作り神が常時鎮座するようになりました。社殿建築の様式も種類があります。須賀神社の社殿は、八幡造りの形式で拝殿と神殿の二棟に分かれ、棟上に千木（ちぎ）と鰹魚（かつお）木があるのが特徴です。本殿の左隣に三つの末社が並んでいます。建物の形は伊勢神宮の建築様式の系統の「流れ造り」です。向って左側の社が「厳島神社」です。宗像三神の一神「イチキシマ姫」を祀ってあります。主な神徳は交通安全です。中央は、「工神社（たくみ）」で鞍手郡内の大工さんが連合して勧請したと伝えられ、物創りの神様です。一番右が、「稲荷神社（いなりじんじゃ）」で、字の通り稲に関する神様で倉稲魂神（うかのみたま）を祀っており、神徳は五穀豊穣と商売繁盛です。

左より：厳島神社、工神社、稲荷神社

八幡造

神社にはいろいろ祭りがありますが「祭り」とは、神と人が酒食を共にして、人は神を敬い、神は人々の願いを聞く場なのです。そこで「お神酒あがらぬ神はなし」の言葉があるのです。又、「祭り」は元来修行でもあり、神と人が出会うには礼と清浄さは不可欠なものです。

神楽笛（かくらふえ）神の送りかお迎えか
旅立ちや女神に供ふ一夜酒
本町　野口靖彦

七夕祭り　楽しかったよ！　カレーもおいしかったよ！　星もキレイ！

八月七日（金）月遅れの七夕にあたるこの日に、恒例の七夕祭りが、こやのせ座で行われました。町内の有志が切出してくださった竹笹の葉に、五時から子供たちが、それぞれの願い事を書いた短冊を、飾りつけました。六時より人形ボードビル・ドラによる人形劇を、みんなで見た後、ボランティアの皆さんによるカレーを食べ、腹ごしらえをしました。たそがれ迫る七時過ぎから今夜の星座の説明と、たなばたの織姫と牽牛の星の話を、私がいたしました。こやのせ座の白い外壁に、パソコン画像を投影してプレゼンテーションをしました。今年は、七月二十二日に全国各地で見られた部分日食の話を中心に説明をしました。国立天文台のHPを紹介し、全国各地でどのような日食が見られたかをお話しました。全国でも北九州は、かなりの好条件地区だったようです。月が太陽を隠すと日食になります。三年後の二〇一二年五月二十一日には金環日食が、また全国各地で見られます。太陽を隠す月が、地球から少し遠くにあって、ちょっと小振りの月が太陽を隠すのが、金環日食。楽しみですね。太陽が一番欠けてみえる東京でも、月の陰が小さいのでドーナツリングのようになります。

空がさらに暗くなってきた、七時半ごろから長野酒店の長野誠一会長の一〇センチ屈折望遠鏡と、私の二〇センチ反射望遠鏡の二台で、月や木星を参加された子供さん達に見ていただきました。

街灯の明るい市街地で、お見せできる星の数には限りがあり、毎年苦労しています。もっともっと、たくさんの星を見たいな、と思われている方も、おられるかもしれませんね、申し訳ありません。

参加された皆さんが、七夕の故事を思い起こしながら、宇宙の不思議や自然科学に興味を持つきっかけになるような、すこしでもわかりやすく、楽しいイベントになれば、と思っています。

こやのせ天文同好会　副会長　数住宗貴

講座　木屋瀬時代（とき）の散歩道　受講生募集中！

11月6日（金）～12月11日（金）の毎週金曜日、こやのせ座を主会場に講座を開講します。7年目となる今年も、九州大学名誉教授の丸山雍成先生などの講義や、木屋瀬宿や佐賀県の長崎街道の町並み見学などを予定しています。修了者のうち希望者は「木屋瀬宿まちなみ案内ボランティア」として登録できます。参加費は五、〇〇〇円（昼食代・バス代込み）です。詳しくは記念館までお問い合わせください。

木屋瀬(三)…宿駅…

国内の主要道路も整備されこれに宿場が配置され、人々の外出や外泊が自由に出来るようになった。時に全国二百余の大名達が、お江戸と自分の領国との間を往復しなければならない参勤交代制も確立した。宿場はいよいよ賑やかに栄え初めてきた。

木屋瀬宿の本陣と脇本陣は本町区にあった。本陣とは、武者が外出や外泊をする事は戦さ旅であると考えていたので、大名や軍主の宿泊する所は、戦い半ばの陣営と考えられるため本陣と呼ぶのである。木屋瀬宿の本陣のお客は大名や幕府の役人や長崎奉行等が主客であった。中でも長崎奉行は贅沢で三の膳までつけていたようである。大名はお供が多く大集団の移動であり、受け入れも大変な事であったようだが、中には夜具や膳碗や風呂桶まで持って来て自炊すると言った注意深い大名もいたようである。大名の止宿の場合にはその数日前に、大名の名を示した長さ四尺巾一尺ほどの関札を持って来る。これを大名止宿の一両日前に高い柱につけて、宿場の出入り口である構口と本陣の前にかかげる。本陣玄関には紫縮緬の幕を張り門には麻の幕を張る。ここで一切の本陣出入りは差し止められる。夜になると定紋入りの提灯を玄関や門にさげる。家臣が町家に止宿した場合も、その家に止宿家臣の名札が下げられる。

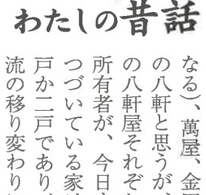
大名を迎える度毎に、町の路面に遠賀川の新しい砂を撒き町を美しくしていた。他国の大名の場合は「撒き砂」と言い事前に砂を撒いておけば良いが、自国の大名の場合は「盛り砂」と言い、路面に砂を盛り上げて置いて進み来る大名の駕籠の直前にて砂を掃き広げるものである。これは非常に力を要する作業であり、助郷村から力もちの若者が動員されていた。

幕府の役人やその他の役人の中で、人馬の無賃使用が出来る員数を明記した朱印状をもった旅行者がいたが、記入された員数以上を強要する者が多く、これが宿民の高負担となるのであった。

一方大名の宿泊では、たとえば二十万石の大名でもお供は三百人はいて、これに人足や馬等が加わっていた。島津公や細川公黒田公の行列は数町にも及び千人はいたと言われている。こんな大部隊の移動だけれど大名の方では人足の賃銭や旅宿の賃銭や木銭やその他を立派に支払われるので、商工業者を初め宿場全体が大いに潤っていた。木屋瀬宿では、いろんな義務負担から生ずる欠損分は、大名の方より生ずる利益によって容易に埋まっていたと思われる。

わたしの昔話

木屋瀬宿の本陣は、七つ門と塀に囲まれていたが、その跡地には何も残っていない。ただ一門だけが現在永源寺の門となって大事に保存されていて、貴重な本陣遺産であり木屋瀬宿の文化財でもある。本陣に相対して八軒屋と呼ばれていた家並があ



る。北の方から言えば、大阪屋、岩井屋、阿波屋、筑後屋、蛭屋、京屋（後に常磐屋となる）、萬屋、金田屋の八軒と思うが、この八軒屋それぞれの所有者が、今日までつづいている家は一戸か二戸であり、時流の移り変わりに驚いている。ともあれ本陣泊りの面白い事に八軒屋は本陣泊りの大名が見渡せる位置などで、大名宿本陣に等しい瓦屋根の家に暮す事は許されず、八軒屋は皆藁葺（ワラブキ）の家であった。その中の阿波屋は私の家であり家の造りは、表の間、中の間、奥の間、座敷の間と一列に四間あり、表の間より次々に三寸位ずつ段上りになっていた。こんな造りは許可が必要であったと聞いている。座敷の間は家臣等の止宿に当てていたのか御簾等で閉ざし平常は使用していなかった。

本陣近くの婦女子は、本陣を出発される大名の奥方に落雁菓子をいただいたり、お姫さまにビードロ指はめをいただいたりしてそれは和やかなお見送りもあった。金銀きらめくお駕籠を召され、多くの婦女子を従えられた優雅なお行列が、北の構口へ消える時、南の構口へ去る時、お見送りの人々の姿と共に宿場木屋瀬は、一時花の園となった事であろう。

本陣近くに問屋場もあり、旅人の宿泊の事や人足や馬、荷物の発送から飛脚等の業務を行っていた。

木屋瀬宿より黒崎宿までの定賃銭

一、本　馬「荷物だけを運ぶ」	銭百二十三文
一、軽尼馬「人だけを運ぶ」	銭八十文
一、乗掛馬「人と荷物を運ぶ」	銭百十六文
一、人　足「人が荷物を運ぶ」	銭六十三文

人足の荷物は五貫目までであり、五貫目を少しでも越えれば二人分の賃銭となる。右は当時高賃銭であったが、筑前六宿街道は難所が多く、往来も常に人出で混雑していたので認められた賃銭である。

柴田豊廣遺稿集より

盆踊り

今年の夏は、局地的な集中豪雨で各地に大きな被害をもたらした。盆踊りも絶えず雨の心配をしながら取り組んでいます。幸い小雨程度で済み、無事終了出来た事にホッとしているのが本心です。

十三日午後七時には恒例になった記念館広場での総踊りを行い、「こやのせ座運営部会」の皆さんにより「かき氷」の接待を受け、新町五町・本町六町それぞれ元気良く屋台を引き出し、灯籠を担ぎ、お寺や初盆家へ向け出発した。

新町五町では十三日～十四日で初盆家八軒とお寺二ケ所の計十回の盆踊りを行い予定通り全て終えた。踊りの庭（輪）も参加者の増加により毎年少しずつ大きくなっています。練習も事前に二日間行い町内会長さんをはじめ多くの方々にご協力を頂きました事に感謝申し上げます。

八月三十日に参加いただいた皆様全員「老若男女」に声をかけ、打上げを記念館ボランティア棟前広場で行い、バーベキューに舌鼓をうち和気あいあいの楽しい一時を過ごした。小さな子供達がバンコの周りを走り回り、中学生は隅でこそっと肉を焼いたり、大人はアルコールを手に大声で笑い…こういった空間を作れる事が益々重要で、伝統文化を大切に継承して行かなければならないと思います。

最後になりますが、初盆家におかれましては踊り子に対しジュースやビールなど手厚き接待をして頂き心より感謝申し上げます。

盆踊り総踊りの風景

新町五町盆灯籠会　山田　靖